

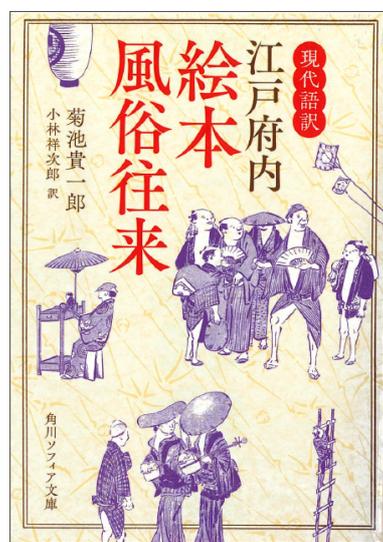
## 幕末お江戸ヴィジュアル百科 — 菊池貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』 —

時代劇風俗はほとんど十九世紀に限定される。元祖捕物帖『半七捕物帳』は明治に入ってから半七老人が幕末を回顧するという構成をとっている。浮世絵を見ても十八世紀の風俗—髪型・着物は「時代劇」とはまるで異なっており、二百数十年に渡る江戸時代でも風俗は何度も変わっている。本書は後年四代目広重を名乗った菊池貴一郎が『風俗画報』で知られる東陽堂から明治三十八年(日露戦争の年)に出した本で、幕末・江戸風俗を知る格好のヴィジュアル百科となっている。(菊地実)

### 石版画のすばらしさ

本書を紹介する前に『風俗画報』や日本橋にあった東陽堂にふれなければならない。『風俗画報』に関しては森銑三・宮尾しげる・朝倉治彦といった書誌学先達の研究・紹介・目次録がある。出版印刷関係者から「日本初グラフィック雑誌」「画報を最初に採用した定期雑誌」「石版画印刷の金字塔」といった高評価もある。歴史・風俗考証研究のみならず明治三陸地震\*1や戦争記録といったニュース報道にも積極的に取り組んだ。さらに浮世絵の伝統をつぐ風俗絵画史としても認められている。復刻版やCD-ROMも出ており、これを題材にした単行本も少なくない。

本書は外・内・雑の三部構成で外・内は正月から十二月と歳時記仕立て。外・内の区別は往来・家中だが、あまり厳密ではない。本書解説で「体系だっているとは言えないところもあるが、細部まで詳しく述べていることが多い」(615頁)のように、幕末二十歳だった江



＜角川ソフィア文庫＞

戸っ子が記憶を頼りに回顧している。

### 太陽暦が生活秩序を変えた

序に「昔の・・・年始の言葉として＜相変わらず＞と言って祝いあったものだが、いまは年々変わるものを良しとするのは、日進を良しとする文化だからであろう」(34頁)。これは重要な指摘。江戸時代とて風俗流行はあったものの、明治の文明開化は十九世紀流「進歩進化」を背景に新しいものに価値を見出し、古いものは「旧弊」として打ち捨てられた。文明開化の象徴、牛鍋・蒸気機関車・洋装・散切り頭・電信・新聞が進歩である。一方明治末からは一部好事家による江戸文化見直しが進んだ。本書はそういった流れの中に位置付けられよう。

#### ＜図表1＞『風俗画報』

- 発行： 明治22年(1889)～大正5年(1916)
- 巻冊数： 通算518号
- 印刷： 石版画(リトグラフ)
- 発行： 東陽堂

#### ＜図表2＞本書の構成

- ・上編 外の部 正月～十二月
- ・中編 内の部 正月～十二月
- ・下編 雑の部

「三月のひな祭りは形だけが残っている・・・永らくさびれた端午の節句も・・・六月の祇園会・山王祭は江戸時代の無勘定。そろばんづくのこんにち電気に道をゆずる・・・七月の霊祭は老男老女の気休め・・・八月十五夜も太陽暦の今日は月も団子とえんをきり」(24-25頁)と風俗変化の凄まじさをなげいている。中でも太陰暦から太陽暦への変化は伝統的祭り習慣や生活を大きく変えた因子である\*2。

### 拾い読み

本書は好きな項目を拾い読みし石版画を眺め風俗を知る、そんなゆったりした読書にふさわしい(惜しむらくは画がモノクロ)。「正月元旦に錢儲けするのものは凧を商う店のほかはない」(36頁)。「魚河岸初荷」「新吉原の弾き初め」「町火消し出初め」「加賀鳶の初出」「鳥追」「獅子舞」「漫才」「こはだのすし」「宝船」と全て正月二日である。「加賀鳶の曲乗りはこれまた無類の上手、江戸正月の花だった」(51頁)。コハダの寿司こそ江戸前寿司の「必ず欲しい」ものだった(54頁)。江戸っ子の面目躍如する記述ではないか！

「神田鎌倉河岸の豊島屋は・・・米店・金物店・新物店・居酒屋店、いずれも豊島屋一家でそのため人は豊島屋河岸という・・・豊島屋の白酒は独自の醸造で無類の味・・・人垣が凄まじいので絶倒する客のために、医師・気付け薬を用意・・・白酒の樽をお堀端に樽の提鼓をきづく」(81頁)と空き樽の堤と混雑ぶりが石版画描かれている。

「百花園の七草」(387頁)「第一は萩、第二は薄、第三の葛、第四は瞿麦、第五は女郎花、第六は藤袴、第七は朝顔」と梅・桜以外の秋の七草で有名になった向島百花園を紹介。

本書は花鳥風月の中では圧倒的に「花」を取り上げることが多い、花見は「上野東叡山」「飛鳥山」「道灌

山」「墨田堤」名所ごとに紹介。

江戸名物の催事は節句が中心だが明治以降急速に廃れた仏教催事も多くとりあげている。「四万六千日」(383頁)は七月九日観音菩薩千日参りで浅草寺をはじめ江戸の観音菩薩有名所が紹介され、中でも日本橋白木屋店内菩薩は「江戸っ子菩薩」として珍重されていた」とある。この記述で、私は親戚から聞いた話がやっと理解できた。

武家催事は外から見たものが多く町人職人の風俗が多い。ただし他所にはない稀な事例もある。江戸三十六見附は大名大旗本が警備する要所。「見附の炊き出し」は番士から小物まで調理を行う毎日千人以上の調理を賄う炊出五郎兵衛と炊出喜三郎の二人を「江戸に名を知られた顔役大親分で二人とない男だった」と紹介し「身内が清潔で・・・調理場には十六・七の竈」と手際の良さと味わいのよさは「真に江戸前の料理である」(513頁)としている。幕末大江戸が町人主体の請負が進んでいる様がよくわかる。

### 過去は美しい

祭り・風俗変化は明治になって大変化した。天下祭りの山車も近代の精華である電信柱に邪魔され消えていった。まさにここは「電柱(殿中)でござる！」かもしれない。

かつて原文で読んだことがあるがわからない言葉が多かった。この当時の書物は当て字や独自表現が多いのもご愛嬌の一つかもしれない。同時代の書物と比較してよ数十年の歳月が経過しており一定のオペラートが甘美な感を与えている。

\*1: 明治二十九年六月十五日/1896/マグニチュード8.5と推定される地震で大津波が押し寄せ、最高三十八メートル。被害者は死者・行方不明二万人以上。

\*2: 以前紹介したが、『金色夜叉』のように未だ太陰暦が染み付いていることもある。洋装も祭りも転換は時間がかかる。

■書誌/ 角川文庫、令和五(2023)年七月発行、文庫判621頁。原本は東陽堂、明治三十八(1905)年十二月発行、菊判袋とじ・二巻。

■著者/ 菊池貴一郎。嘉永元(1848)年-大正十四(1924)年、江戸生まれ。菊池家の養子となる。蘆の葉散人を名乗り、後に四代歌川広重を襲名。著書は『江戸の華』『江戸風景』など。